



# 椎谷神社



外尾町の椎谷神社は、慶安4年(1651)9月10日の創祀といわれ、伊弉那岐尊、伊弉那美尊、天穗日尊が祀られています。有田町の六区から九区までの氏神社でもあります。資料館には明治39年の寺社台帳がありますが、神社の拝殿や灯籠、鳥居などの縮尺図が詳しく書かれています。

拝殿の中には、物語の一場面と水田耕作の様子が描かれた2枚の絵馬がかかっています。写真は修復前の絵馬の一部です。絵の具が剥落していますが、現在はきれいに修復されています。

# 皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報

No. 24

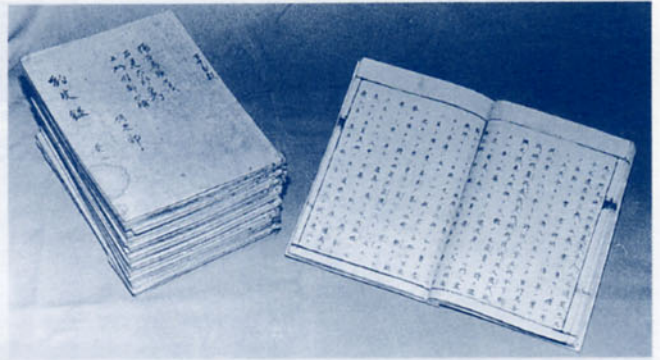
# 正司 考祺

寛政5年(1793)9月、正司考祺は父・征七郎の次男として有田・岩谷川内に生を受けました。幼名を米十、通称を正治といい、大谷の近くに住んだことからその地名にちなみ碩溪と号し、また南峽とも号しました。

兄の儀六郎は窯焼きを営み、考祺は家業であった絵付け用の絵筆の販売業を継ぎました。このほか金融業も営んでいます。考祺の幼少期のことは明らかではありませんが、学問を好んだ彼は、家業のかたわら読書などに励んだものと思われま

す。文政11年(1828)、各地に被害をもたらした子年の大風により有田では大火が発生し、有田千軒とうたわれた皿山はわずかの家屋を残して灰塵と化しました。このとき考祺は持ち合わせていた米20俵をはじめ私財を投げ出し、人々の救済にあたっています。

また、富強策を説き「けんぽうふじょうろく儉法富強録」5巻をまとめ



●正司考祺著書「豹皮録」

10代藩主・鍋島直正の側近であった古賀穀堂に提出しています。伊勢参りの禁止、厄入り、厄晴れのときの酒食の禁止など藩の儉約令の中に取り入れられました。

天保4年(1833)、40歳を迎えた考祺は江戸、大坂へ遊学し、ここで多くの文人たちと親交を持ちました。江戸では、北条流の兵法の免状も得ています。このあと、42歳で古今の武将の言行録とでもいうべき「ひょうひふく豹皮録」100巻、52歳で「武家七徳」18巻、58歳のときには商人の道徳や稼業繁盛を説いた「家職要道」など次々にびやう膨大な著書を著しています。

学問を実際の政治に生かそうとした熱心な彼の姿が、時間を越えて問いかけてくるようです。



## 皿山の風物

# 年木谷 護摩焚

1月17日、泉山・年木谷の琵琶嶽観音で護摩焚きが行われました。毎年この日に行われるこの行事は、年木谷22班の人たちが中心になって行います。起源ははっきり分かりませんが、準備に集まった近所の



人たちは「父親や祖父たちも同じようにやっていた」といい、同じように準備をしています。

境内の掃除をしたり、竹や笹を切り出すなど1週間ほど前から準備が始まります。当日は、炊き出しのおばさんたちによって、お参りに来る人たちのために340人分ものお弁当が用意されました。

新年を迎えるために飾った注連縄や、古いお札、仏壇など粗末に扱えないものを燃してもらうために、たくさんの方が集まってきます。大部分の人は泉山地区の人ですが、隣町からくる人もあるといいます。

お堂に集まり、山内町の定林寺のお坊さんを迎えます。お経があがり、お説教が終わると戸外へ移ります。四方に笹を立て注連縄を張った中に、竹で組んだ枠に積み重ねたのき松に火がつけられます。この結界の中に入れるのはお坊さんだけで、お参りに来た人はこの外で見守ります。読経とともに名前が書かれた護摩木が1枚ずつ火中に投げ込まれ、交通安全、無病息災、家内安全などそれぞれの願いを込めながら終了しました。

## 小溝上窯

—1993年夏・1994年冬の調査から—

今回は1993年夏と1994年冬に発掘調査を行った小溝上窯について報告します。この窯場は以前、佐賀県立九州陶磁文化館が発掘調査を行い、2基の窯（1号窯・2号窯）を発見しています。そして、その後付近を歩き回ってみるとその2基の窯の物原（失敗品の捨て場）のある谷と反対側にある谷にも多量の失敗品が捨てられていることがわかりました。どうやらもうひとつ窯がありそうということになったわけです。そこで1993年夏には窯場の丘陵を横断するように細長く発掘して幾つの窯がどの位置に存在したかを探りました。その結果、1号窯・2号窯とは離れた場所に床下と思われる焼土面が現れました。

そして、新しく発掘された窯（3号窯）の発掘調査を年が明けて早々に開始しました。調査を進めていくと遺存状態の悪い焼成室の奥壁が幾つも現れてきました。3号窯とした窯も1基ではないようです。図面の上で奥壁と奥壁をつなげてみると少なくとも2～3基以上の窯が存在したことがわかりました。小溝上窯全体では4～5基以上ということになります。これに小溝中窯・小溝下窯を加えた「小溝山」全体ということになると6～7基以上の窯が存在したことになります。もちろん、これらの窯全てが同時に操業していたわけではありませんが、「小溝山」は当時の有田の窯業の中心地の一つであったことは確かなようです。

さて、ここで小溝に関する文献を見てみましょう。まず、「皿山代官旧記覚書」安永2年（1773）の文献の中には家永壱岐守が「有田郷小溝原」に住んで窯業を営んだ後、現在の土場（泉山磁石場）を発見して白川山の天狗谷窯を築いたという内容が記され



●小溝上窯床面（磁器碗とトチンが見られる）

ています。また、佐世保市の今村家文書にある元禄6年（1693）の古い窯場についての調べには「小溝山頭三兵衛」と記されています。さらに金ヶ江家文書には、金ヶ江三兵衛は「有田郷乱橋（現在の三代橋）」付近で農業を営んだ後、泉山磁石場を発見して天狗谷窯を築いたという内容の記載があります。三代橋は小溝にほど近い場所にあたります。そして、寛永14年（1637）に窯場の整理・統合が実施された時の新しい窯業圏の範囲には小溝は含まれておらず、その後は窯業が営まれた形跡はありません。つまり、整理・統合の際に窯場が廃止された可能性が高いようです。

これら古文書の内容や発掘調査の結果を考えますと、小溝の窯場は有田焼が創始されてから寛永14年の窯場の整理・統合までの間の有田焼の中心地の一つであったことがわかります。そして、その窯場に登場する人物がいずれも泉山の磁石場の発見にまつわる伝承に関わりをもっていることを思えば小溝の窯場は有田焼の原点を考える上で欠かすことのできない窯場であると言えるでしょう。

（野上 建紀）



# 三空庵広場の大地蔵



上幸平と大樽の堺の三空庵広場には地藏堂があり、木製の大きな地藏が安置されています。像の高さは、191.5センチもあり、桧で作られています。この広場に大きな柿の木があったので、地藏は「柿の木地藏」と呼ばれ、カキノキシユウジ班（柿の木小路班）の人たちによって祀られています。

製作は江戸時代で、背面には文政8年（1825）に着色されたことが記されています。また、文政11年（1828）の大火のときには、激しい風雨の中で大火となったので、徳三郎が駆けつけ屋敷に運んだとも記されています。確かにこの地藏の下の方には火事にあったような焼け跡が残っています。地藏を運び出す時の話として、次のような伝承もあります。

重くてなかなか動かすことができなかったので、「地藏さん、かるうて逃ぐっけん、かるうなってくんさい（背負って逃げますので、軽くなってください）」と言ったところ、地藏はたちまち軽くなり運び出すことができたというものです。それで、今日もこの地藏の姿を見ることができるのでしょうか。

また、この柿の木地藏は子供のお地藏さんとしても大事にされています。この地藏の近くには川がありますが、この広場で遊んでいて川に落ちてもけがをしないと、子宝に恵まれるなどといわれています。

## 街角の歴史

## お知らせ

### 古文書教室

平成6年度古文書教室の生徒を募集しています。教室は毎月1回、初級と中級の2講座があります。この機会に、有田の歴史を紐といてみるのはいかがでしょうか。

- ・日 時 毎月第2水曜日  
(中級) 13時～15時  
(初級) 19時～21時
- ・講 師 前山 博先生（伊万里市歴史民俗資料館館長）
- ・テキスト (中級) 酒井田柿右衛門家文書  
(初級) 代官勤方書付写
- ・申し込先 有田町歴史民俗資料館  
Phone. 0955-43-2678



●古文書教室受講風景

### 白川の細流

弥生のうららかな季節がやってきました。卒業、入学と節目を迎える人も多い季節です。

この春心機一転、新しいことにチャレンジしてみようと思います。皆様もお健やかに。

(萬)

### 皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報 No.24

発行年月日 \* 平成6年3月1日  
編集・発行 \* 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地1  
☎0955-43-2678